

報



會

會 岳 山 本 日

99

月 一 十 年 五 十 和 昭

辻本満丸氏とスクアレ

湯 浅 巖

ナンダ・コート遠征の準備に多忙を極めてゐた昭和十年早春の或る一日、同氏の愛婿であり當時山岳會理事であられた中司文夫氏に伴はれて閑静な代々木山谷の御宅に辻本満丸氏を御訪ねしたことがあつた。豫ねて其の令名を「山岳」誌上其他より聞いて、我々の先輩者として尊敬してゐた辻本氏に初めて御目に掛り、膝を交へて色々山岳愛好論を御聞かせ下さつたり、我々には珍らしい昔時の登山風景などに就いて御聴き出来た事は、平常健康を害されて努めて訪問者を断つて居られた同氏だけに、僕の大きな喜びであり又光榮でもあつた。祖父と孫との様な年齢の差異があつた辻本氏と僕であつたが、山岳に關しての話になると年齢を超越したものがあつた、同氏の健康の理由よりして長話は禁ぜられてゐる事を知り、僕は努めて話に熱中する事をさせてゐたが、同氏は次ぎから次へと何時盡きるか分らない位だつた。同氏獨特の深い造詣を持たれ、近世アルピニスト論よりヒマラヤ遠征論などに就いての鋭い觀察は、若い僕にぐんぐん突込んで來られた事は同氏の山岳に就いての豊かな経験と深い研究によるものと、ただただ驚く以外に何物もなかつた。

最近では心臓が弱くて運動は出来なく、好きな山登りも殆んど断念せられて、時折近郊の低山に逍遙を試みてをられるといふ事であつた。其の折でも何時か御供させて戴いて、靜かな山の中で色々山に就いて御話を御聴かせ願ひたいと申し上げると笑つてうなづかれて居られた。同氏が趣味としての山岳愛好者であられる以外に公人として、東京工業試験所に化學者として研究に心身を捧げられてゐるといふ事を初めて知つて僕は何かコワイ様な氣持に蔽はれた。

中司氏が僕に辻本氏との面接の機會を與へられたのは、同氏が多年研究を重ねられてをつた油脂スクアレに關してであつた。

『明治三十九年（一九〇六年）私は初めて相州小田原産の黒子鯨肝油から此の炭化水素を發見したが、當時不注意にも此の發見の重要性を閉却して實驗を繼續せず、漸く多年を経過して大正三年（一九一四年）の末頃から改めて多數の鯨肝油に就き研究を行ひ、終に此の炭化水素の組成がC₂₇H₄₆であることを決定しスクアレノ Squalene と命名した。蓋し此の名稱は黒子鯨及び最も多く此の炭化水素を含有する相鯨、鰹角鯨、天

鰹鯨鯊等の屬する科名 Squalidae（角鯨科）に因るものである」と化學工業資料第四卷第四號に書かれてゐるスクアレンを、辻本氏は僕等のヒマラヤ遠征を聴かれ、光榮にも持參を薦められたのであつた。そして貴重な現物を見せて戴いて、又同氏が直接東京工業試験所の罫紙に書かれた説明をもとに、精細に懇切に御教示願つたのであつた。左に其の説明書きを原文のまま載せる。

『スクアレノ(Squalene)は深海産又は北氷洋産の鯨(例へば相鯨・黒子鯨以上・姥鯨別名馬鹿鯨北氷・深海産)の肝臓中から發見した高度不飽和炭化水素で、化學上テルペン類に屬する化合物(Dihydrotetratene)であります。最近オリヅ油及び酵母脂から發見さる。前記の鯨類が深海又は極洋の生存に適するののは、肝臓中の炭化水素が根本となつて、それから多大のエネルギーの供給を受けるのが少くも一原因かと思はれます。此の考から登山(殊にヒマラヤの如き純高山岳の登攀)に於て疲勞困憊の極端の場合、又は凍死に瀕した場合は——貴登山隊には此の様な場合は無いと思ひ又無いことを祈りますが——有効でないかと想像します。勿論未だ實驗は致しません。スクアレノは毒物で無く相當多量飲用しても何等害はありません。然し一回提供のカプスル三個乃至五個位を飲用して下さい(カプスル一個はスクアレノ約〇・〇四合入)。』

斯くて約百個のカプスルが、丁寧に包装された箱に入れた一包を有難く頂戴して、醫療器具・藥用類のトランクにつめて印度に旅立つたのであつた。

同氏の懇篤な御好意に報いるために醫療係を受けもつた僕は、現地に到着して第一キャンプを中心基地として、上方キャンプと連絡をとり、第三キャンプに若干の備付けをなし

目 次

- ・ 辻本満丸氏とスクアレノ……………一
- ・ タイヤルの印象……………二
- ・ 熱河の山……………三
- ・ 前穂高に於ける遭難に就いて……………四
- ・ 日本大學山岳部……………四
- ・ 白馬岳南段に於ける遭難に就いて……………四
- ・ 大阪高校旅行部……………五
- ◇圖書紹介……………七
- ◇切抜帳・會務報告……………七

て、其の實驗の影響・效果の成績リストを作製して萬全の策をとつた。然し登攀努力に全身を捧げなければならなかつた僕等には、高度に對する身體の影響を漠然と考へる以外に科學的に確かな論據・實驗的記述の知識を有せぬため、數回の飲用の影響を客觀的に示す事は出来なかつた。

僕等の小遠征はすべてに對して非

科學的の誹を受けてゐるかも知れない。然し一九三六年のナンダ・コート遠征は、何等の蔽もなく開放した氣持で忌憚なく云へば、二萬呎の一高峯に登る以外他に餘力を消費することが出来なかつたのである。それには種々の理由があらう。僕は此處で一々其の説明を記する事を差控へたい。然しながら全然他の方面を顧みなかつたといふ事ではない。多くの経験と知識の獲得に努力した。非常に苦しい立場の時でも一時も忘れた事は出来なかつた。登攀中安逸した氣分であつた事はなかつた。緊張した氣分の連続であつた。多くの小遠征や登山に於て淺學の輩や、門外漢が特別に理窟をつけて、六ヶ敷い理論をならべて得意になつて、堂々と實驗報告乃至は研究と稱して發表してゐるものがあるが、僕はそれは笑止の沙汰だと思ふ。所謂數字の羅列や圖解式の説明だけが立派な報告ではないと思ふ。勿論専門家が本格的に實驗を試みるのであつたら、それが如何に幼稚なものであつても、それは正に信用すべく、尊敬すべきものである。筆先が他方に外れたがこの考へは僕個人の考である事を特に記して置きたい。

一九三六年初冬歸朝して早速辻本氏を御訪ねする豫定であつたが、何かと多忙の中に年も明けてしまつた。そして續いて大阪の聯隊に入營してしまつたので、僕は遂に辻本氏に親しく御目に掛つてゆつくりヒマラヤ

の御話を聴いて戴き、又スクアレンの實驗の經驗を御話する機會がなかつたに残念に思つてゐた。たまたま四月二十四日同氏の長逝を聞いて、僕はあれほど迄若い僕を勵まして下され、貴重なスクアレンの提供を受けた御好意に報ゆるに何一つ出来なかつた事を靜かに考へる



— 荷 物 —

繁雜な事務の爲め、つい眉溪から霧社迄の荷物の高砂を頼むのを忘れてしまつたので、仕方なしに吾々五人で七十貫以上の荷を背負はなければならなくなつた。今迄の疲れのせいかリユックが肩にこたえる。途中上からマラリヤに罹つた支那人が駕籠で擔がれて來た。買物歸りの高砂達が、下方から挨拶をして追ひ越して行く。こちらは荷が重いので仲々

と、淋しい氣持で一杯である。甚だ失禮な言葉であるが、今はなき辻本満丸氏を、僕には大好きな祖父を亡したと同じ様な愛惜の念に胸一杯に蔽はれて、臉を閉ぢると今でもはつきりと在りし日の面影を浮べる事が出来る。

象 印 の ル ヤ イ タ

雄 達 國 小

抄取らず、おまけに雨が降り出した。高砂をつかまへて、あと霧社迄何のくらいあるかと尋ねると、男の方はまだ遠いと云ふし、女の方は近いと云ふ。どちらだか判らない。終には男がどなる、女も負けては居ない、これこそ本當の蕃聲を張上げながら往つて終つた。後からオウエンスみたいな立派な體の奴がやつて來た。「重いですね」と云ふので、こりや占めたと思つて「霧社まで荷物を持つてつて呉れぬか」と頼むと、「自分の荷物は自分で持つて行きなさいね」には皆ダアとなつた。お蔭で一里十二町の道を三時間半もかかつて、霧社へ着いた時は眞暗だつた。

— ス キ —

今日は人夫の都合で一日休養になつたので、青木巡査と一緒に今年十七のオカンハロウにスキーを擔がし

て、合歡主山の雪の有る頂上の緩斜面へ、お辨當を持つて遊びに出かけた。天氣は上々、望遠鏡を出して新高、苛萊、南湖、中央尖山、次高の連峯を眺める。次高の壁が南國の太陽に白く輝いて居る。早速裸スキーを試みる。ガラメ雪の上に氣持よくボーゲンを書く。一臺しか持つて來ないので代り番こに滑る。その中に乙君がオカンハロウを後へ乗せて滑り初めた。跣足なのでうまくスキーに乗つて、腰へぶらさがつて居る。皆で面白がつて居ると、雪の薄い所で石にひつかかつて轉んでしまつた。上つて來たのを見ると、彼の足から相當血が出て居るので、大丈夫かと云ふと大丈夫ですと云ふ。彼等の足は實に強い。スキーは面白かつたらしく、彼等にしてみれば先祖代々初めての事である。吾々の初めてとは譯が違ふ。面白かつたかと思つと、うんと頷いて笑つて居る。後から青木さんの話では、横さんが來られた時スキーには絶好の地だと云はれたそうであるが、雪さえもう少し長く融けなければほんとに好い所だ。何しろスキーを持つて來た人は一二有つたが、雪が無くて駄目だつたそうで、合歡では吾々が滑つたのが最初だと云ふので、たつぷり一日楽しんだ。夜になると内地では經驗した事がないほど、雪燒の爲めに顔が變形したのには弱つた。

— 途 中 —

人夫の高砂も揃つたのでいよいよ

出發とする。高砂十二人、それに替丁一人、青木巡査、部長先生と吾々合計廿人。途中合歡主山へ繪を書きに行かれる先生と別れて、吾々は佐久間峠への道すがら先生とヤッホーの交換をする。入墨をした言語の通じない高砂等は、「センセイ」と聞き覚えの片言を云ひながら彼方の先生を指さす。彼等とは話が出來ないので、顔が合ふとにやつと笑ふと向ふにもやつと笑ふ。石門の駐在所で一休する。合歡東山の北側には未だ大部雪がある。先の心配もあるので高砂に「大部雪が有るが行けるか」と聞くと「山へ行けば雪はある」と平氣なものである。こんな事なら内地から心配して來る事はなかつたと喜んで、送つて來て下さつた青木巡査と別れ、吾々一行は苛萊へと山脈を進んだ。

— 風 —

夕方から吹き出した風が遂に雨まじりの嵐となつた。アドバンスキャンブ用の輕いカマボコ天幕は、風の壓力で本當の板カマボコみたいになつて、チヤンコに押しつけられてしまふ。中は船の浸水騒ぎだ、マツト、シュラフ、次から次へと水にやられる。皆風のあたる方へ寄つて頑張る。その中に雷と共に雹が降り出して肩を打つ。隣の高砂の天幕へ「大丈夫か」「頑張れ」と聲をかける。夏の天幕なので心配になる。カンパンを持つて見に行くと、彼等は天幕へ入つたのも初めてなので、若いのが支柱ばか

竹内亮

熱河の山

熱河の霧靈山（五龍山）は、滿洲第二の高峰であり、山又山の南熱河山地に君臨する名山なので、是非一度登頂の機を得度いと思つて居ましたが、今度熱河省と山麓の興隆縣との共同で警備その他の手配を充分にして登山するといふので参加し、一行三十名と共に九月十七日無事登頂出来たのは本懐の至りでした。興隆から紅梅子谷に入り約三里許りの登りで草原の間にカラマツの疎立する頂上に達しました。頂上の展望は雄大そのものですが、北支が足許にあるのも愉快です。途中八合目迄耕地あり、九合目に寺があります。樹林の荒れ方の甚しいのは全く驚きました。それが今から二十年前は、清室の風水禁地の大密林だったのですが感慨無量です。今日興隆から六時間バスにゆられた承德に出て来ました。明日新京にたちます。

（九月十九日 承德にて）

り押へるものだから、まはりのベツグが抜け、吹き上げられて寒い寒いところばしてゐる。其の真中で老人のビドビヨンが悠々と寝て居る、嵐は益々ひどい。合歡へ歸つてから「あの晩はひどかつたでしよう、霧社ぢや家の屋根が飛ばされたそうですよ」と云ふ話だった。

—— 獵小屋 ——

栗飯がぐつぐつ煮える、時々高砂特有な片方のつべらな杓文字であくをとつて居る。南峯へ行く班と分れて北峯へ行き、昨日雨の中を此の苛菜下の獵小屋迄下つたのである。茅葺きの屋根から雨だれがボタボタと落ちる。南峯へ行つた連中と約束したので、今日で二日待つた。うまく能高へぬけたんなら好いんだがな、と思へば今度は實に天氣に恵まれなかつた。苛菜へ入る日と北峯へ出掛けたい半日が、晴れただけである。高砂等は黙つて膝小僧をだいて、歌も歌ひあきたと云ふ様な顔をしてゐる。彼等も年寄の居る時はあまり歌を歌はない。此の間の嵐の晩には吾々があまり審判を張り上げたので、天氣が悪くなつたのだとビドが云つて居たと警丁の板本君が話してくれた。彼も蕃人出身である。而し今は若いのが五人なので軍歌や流行歌を歌つて居た。栗飯も食つたし、煙草も無くなつて退屈になつたので、蕃語の歌を教へてもらふ。實に哀調を帯びて節廻しなが長い文句は短い。「イマー、ラアロー、マトモダア、チー、ラマ、オイ」。友達よ、あなたの名前は何かと云ひますか」と云ふ意味だそうである。歸る迄にはとうとう二つものにした。

—— 大斷崖 ——

廣い立派な横斷道路も、タロコの斷崖迄来ると狭くなつて谷側には手摺が附いて居る。下から浴衣を着て口紅をつけた高砂の娘が二三人やつて来て、「今日は」と笑ひながら挨拶をして行く。タロコ溪にはもうほとんど蕃社は無い、皆政策で下に移住してしまつたので寂寥の感がある。それが今度はタビトの金鎖（逆輸入である。それでか浴衣を着、口紅をつけ白足袋をはいたその姿は下に降りた時におぼへたのだらう。何んだか竹に木をついだ様で見られない。やはり彼等はバラ（蕃布）をまとつた跣足の姿が似合はしい。何んと云つても臺灣の山旅から高砂族を除いては興味が半減してしまふ様に思はれるが、然し彼等も結局は同化されつつある民族なんだ。

會報原稿募集

會報に原稿を御送り下さい。近頃會員通信がめつきり少なくなりました。會員通信、地方消息等は最も歓迎する處で御座います故、多數會員諸氏の御寄稿を期待致します。

原稿締切日 毎月十五日

「山日記」内容豫告

全國登山團體一覽
軍機保護法

登山の注意

冬期登山

應急手當及び登山衛生

服裝用具食料

登山用品表

登山用食料目錄

高山植物採取規定

日本高山表

山岳遭難救助機關參考資料

概念圖十一葉

寫眞二葉

登山日程・山小屋・山案内

日記欄は一頁五分とす、其他昨年度に比し改良補正せる箇所多し
定價 壹圓五十錢（未確定）
但し會員二割引（送料別）
發賣 十二月上旬の豫定

「山日記」會員二割引の詳細は次號に掲載いたしますから、暫くお待ち下さるやうお願い致します。

（吉澤生）

最高權威を誇る山岳雜誌 一部七〇錢
山と溪谷 64號 年極四圓一〇錢

執筆：武田久吉、關口泰、渡邊公平、深田久彌、安齋徹、菅沼達太郎、吉澤一郎、森本大男、高井房雄外數十氏、丹澤盛談會（目下發賣中）

二六〇一年山と溪谷社版 定價一圓五〇錢（送一〇錢）

アルパイン・カレンダー

豪快な山岳とそこに流動する氷・雪・雲の自然美を傳へる本邦第一線のエキスパートの手に成る崇峻豪華な山岳繪曆（十一月月上旬發賣）

中村謙著 塚本園治裝幀

東京附近雪艇の旅

（山と溪谷社選書）第一篇として本社が全力を傾けて編集した興味津々たるスキーツアーの紀行と新案内書

寫真地圖多數挿入（十二月上旬刊行）

山と溪谷社

東京芝田町6-4
振替東京 60249

二つの遭難報告

前穂高に於ける遭難に就いて

日本大學山岳部

昭和十五年八月十三日、前穂高に於ける我が日本大學山岳部々員、入來重弘、上關徹也兩名の遭難に際し、各方面に御心配を御掛けせし事を茲に深く御詫びし、又一部に誤り傳へられたる事實もあり、今回の遭難の真相を發表致す事が我々の義務と存じ、次に簡單乍ら報告致す次第であります。

我が山岳部は七月二十二日より三十一日に亘り、本年度夏季生活を穂高淵澤池ノ平に行ひ、我が山岳部としても始めての大部隊の生活を無事終了し、徳澤に於いて解散し、其後二日の休養の後、八月三日より十日までの豫定にて人員十名を以て第二回穂高生活に入り、奥又白池畔にキャンプを張つたのである。

然し八月四日より十一日に至る間、一日の中必ず一度は降雨がある、と云ふ状態であつた。唯八日にガス後時の日を得て、落石を警戒しつつ本生活の登攀豫定たる前穂高東面バットレス及び第四峯側壁の偵察を行つた。十二日漸く天候回復の兆萌したるも、最早豫定の日限も切れし故、

十二日迄には三名を残し大部分下山したのであつた。

十二日、十三日は晴、前夜は入來、上關兩名のみ池のテントに宿泊す。明けて十三日午前中にテントを出發し、前穂高北尾根第四峰に向つたものの様である。残る一名佐藤は午後遅く徳澤より池のテントに到着せし時、同じく此の日に此所にテントを張りし好日山莊の海野治良氏及び大阪三越山岳會の方五名より次の事を聞けり。即ち午後一時二十分頃北尾根第三峰の方面に、鈍い落石の如き音を聞けりと。かくて兩名夜に到るも

野氏と共に東面バットレス第一テラス邊りまで搜索しつつ登り、又四峰に登りて東面一帯を眺めたるも人影らしきもの見當らず。一方大阪三越山岳會の方に托して當時淵澤に居れる本山岳部員崎田に連絡し、夕刻佐藤は淵澤にて崎田と會ふ。此處に於て入來、上關が上高地等へ下つて居りしせぬかと云ふ僅かな望みを捨て切れざりしも、若し遭難したるならば我々が少人数で搜索する事は徒らに日時を費すのみと考へ、十四日夜より十五日にかけて上高地に下り直ちに有力なる部員十數名に來援頼む旨打電す。

着す。翌十六日三名は先發として池へ登る。その時海野氏等より再び報告あり。前日十五日海野氏等が北尾根第四峰明大ルート登攀中、オーバーハンク邊りより斜め下方にルックサック及び靴らしきものを發見されしとの事を聞く。望遠鏡にて見るに、之は正しく上關のハイサックなるを知り、悲しくも墜落したるを信ぜざるを得なくなりしも、搜索範圍の極度に狭まりたるに勇躍して搜索を開始す。かくして第四峰下のシュルンド及びクレバスを隈なく搜索せるに、明大ルート取付き上側の赤い岩のシュルンド内に、僅かの距離を置いて殆ど一箇所にザイルに結び合つたまま墜落せる兩名を發見す。眠れる如き姿に「入來」、「上關」の名を聲を限りに呼べども答へなし。兩名とも身體の各部に強烈なる打撲を負ひ、即死せるものと斷定す。直ちに徳澤に下り遺骸引下しその他の打合せをなす。十七日救援隊は池のテントへ登り、又他方警察及び人夫の手續をなす。御盆直後の爲め人夫居らず、夜に到り漸く上條孫人以下十五名徳澤に來る。翌十八日遺骸を上高地へ下し、十九日檢死の後、松本にて茶毘に付す。かくて遺骨は御家族及び部員に護られて、二十日新宿着、在京部員、先輩及び學校關係の方々の出迎へを受けて悲しき歸京をなす。

× × ×
思ふに今年は天候不順にして、山

のコンディションの悪かつたのは事實であつた。然し二人のみにての登攀中なる故、墜落の直接原因或ひはその地點の憶測は許されざるも、途中に散落せる持参品等の位置から推察するに、第四峰東南壁或ひはその直下テラス邊りから墜落せしものと思はれる。尙當時ピトンを使用して居らなかつた様である。我が山岳部

白馬岳南股奥に於ける遭難に就いて

大阪高等學校旅行部

當部としては昭和十三年夏以來、白馬岳南股奥の山々に部の主力を集めて來たが、昭和十五年四月に於ける中條・島雄兩先輩による不歸第二峰東面直登以外には、取りたてて記すべき登攀もなく、今年こそはと先輩現役一同張切つてB・Cに集つた次第である。参加者は畑中教授以下現役八名、先輩四名である。

八月一日、B・C設置。二日は中條先輩によつて南瀧迄の偵察がなされたが、雪溪の状態悪く、このコースによる登攀は不能と判明す。以後六日迄は天候比較的不順の爲登攀なく七日を迎ふ。

八月七日 晴後雨 南股生活最後の日を快晴に恵まれ、今迄の無爲を一舉に取りかへさんものと、中條・島雄・片岡・南・大西の五名のバ

第一線のメンバーたる二人の優秀なる部員を失ひて、悲しみの中に我々が知り得たる事は僅か之丈しかなかつた。

此の度の遭難に當り御同情を寄せられし各方面の方々に深く感謝の意を表し、簡單乍ら遭難顛末を報告致す次第であります。

テイを以て、未だ全然足跡を見ざる烏帽子澤を溯行し國境線に達せんとす。午前九時B・C發。僅かにして不歸澤と分れ、稍々行つてクレバスの爲左岸を捲き、長時間を要して雪溪に下る。行くと高さ二十米餘の瀑布二段に懸り、ここから左の尾根に取付き、脆い岩場に緊張した登攀を續けて草附に入り、晝食として乾パン、プリマを食す(十一時半)。

島雄が先頭となり、猛いブッシュの中を行く。千五、六百米の高度で本尾根に出、相變らずブッシュの連續と急傾斜の爲極めて困難な登高を續く。午後三時半頃雨が降り始めた。一同ウインドヤッケを着る。懸て熊笹交りとなり滑り易く、前進は益々困難を極む。遂に笹松地帯に入りしも、雨に濡れた笹松こぎをやつて全身づぶ濡れとなつた。五時過ぎ白樺の木の下でプリマを鳴る。依然として雨。氣温も降下してガタガタ震え

出す。暫くしてキレットに出遭ひ前進を阻れ右に捲いて進む。烏帽子山に達した時は既に暮色濃く、北方に伸びた尾根に迷ひ入り戻つて左を捲く。午後六時、段々暗くなり廻てガスが四圍を包む。尾根筋を下りて直接北行し、鐘温泉へ達せんと議起るも、矢張り縦走路の方が安全とそのまま進むこととする。濡れた俵松こきを長時間續けた爲、疲勞甚だしく衣服を破る者も出て来る。手足が凍えてきて體が大きく震える。然し俵松は次第に小さくなり、七時頃一寸した裸地に出た。此處で夕食を攝り、羊羹、胡瓜を食す。

マツチを出したが火等起せさうになく、あるだけのシャツを着込み、

ヤツケを絞る。暫く前進したが、足下が眞暗で見えず、ともすれば後部がおくれ勝ちで、議論の末ビバークと決す。北東風を防ぐ爲南面せる斜面の俵松下に、俵松を切つて雨風を防ぎ、ザイルを敷いて一列に腰を下し、グラウンドシートを頭から引つ被る。疲勞の爲ともすれば眠りに陥るので一同寮歌を唱つて勵まし合ひ、睡りかける者の名を呼び合ふ。浸み込むやうな冷氣と長時間の屈膝に、兩足が痙攣を起す。寝たらそれ迄なので絶えず名前を呼び合つた。午前三時頃雨が止んだやうで、風が出てきた。ガスは依然として深い。

八月八日午前五時、物が見える位の明るさとなり、水筒の水で煉乳小罐を融き一口づつ飲んで出發。頭が

重く足がフラフラする。ピークを一つ二つ越して國境線へ出ることが出来た。

尾根筋へ出ると越中側から激しく吹き上げてくる。縦走路を烏雄・大西・南・片岡・中條の隊形で進む。強風は昨夜來水溜しになつた體に切れ込むやうにこたへる。片岡と中條が遅れたが、この強風の中では立止ることさえ苦痛で、早く尾根筋を避けんものと遮二無二進む。鐘温泉への下りで暫く待つ。片岡が来る。中條はまだ姿を見せないが、彼のこと故大丈夫と信じつつ、ガラガラ道の轉ぶやうにして、午前七時過鐘温泉についた。

片岡・中條が来ないので小屋の主人丸山忠男氏が辨當持參で迎へに行く。十時半頃丸山氏のみ下山し、縦走路迄誰も見當らず、國境線にて案内人福島輝一郎氏に會ひ、偶然同氏が唐松へ縦走中天狗の方二丁餘りの所でピッケルの放棄しあるを發見、すぐその東側雪溪側に中條の死體を見つけし旨聞き、直に現場に赴き既に中條の事切れたるを確め、引返して來たと報告す。尙往復とも片岡は見當らず、行方不明なりと。

偶然白馬縦走御嶽定の畑中教授、丸山作吉來られたので、烏雄・丸山忠男氏と二班となり正午頃小屋を發して片岡の搜索に向ふ。温泉より千米の地點にて烏雄等は、偶然岩陰より立上れる片岡を發見す、時に午後二時二十分。幸ひ何等外傷なく唯疲

勞と飢寒と寒さの爲其の時迄意識を失つてゐたものと判明す。直にウキスキー其の他の食糧を與へ、烏雄は其の場で介抱に當り、先生と作吉は中條遭難現場へ、忠男氏は連絡に下つた。片岡は二時間餘の休息の後山上現場より下つた先生等と共に小屋に下る。片岡はこの時既に獨力にて歩行することが出来た。

爾後中條遭難の手配に奔走す。八月九日、中條の遺骸を現場より引き下し、四時過ぎ温泉小屋を出發、午後九時頃丸山徳榮方斎。先輩、部員、御遺族の方々相集りて淋しき御通夜をなす。

十日、午前十時出棺、松本火葬場にて荼毘に附し、午後十二時一分發列車にて中條君の遺骨を抱き淋しく大阪に歸る。

× × ×

不幸遭難逝去されたる中條徹君(當時大阪帝大理學部化學科在學)は大正八年二月廣島に誕生、中學、高校、大學を通じて實に豊富な登山の経験者であり、その登山經歷中には次の如きものを含む。

昭和十二年三月(唐松岳、立山) 同十三年一月(唐松岳、五龍岳)、同年三月(唐松岳より鹿島槍縦走)、同年(槍平より槍ヶ岳)、同十四年三月(觀岳)、同年四月(御岳)、同年八月(不歸岳東面)、同年十月(瀧谷)、同十五年三月(不歸岳東面第二峰直登)。

寒飢と疲勞とによる凍死と認められ遭難當日前の行動をきくに、多少平常より疲勞してゐたやうである。何時もむしろ慎重なのに、當日は食糧の携行等不十分であつたことは甚だ遺憾である。

(右は本年九月同旅行部發行「遭難願末報告」より部長桑原武夫氏の承諾を得て拔萃せるものなり。編者)



圖 書 介 紹

Himalayan Journal

VOL. XII. 1940

今年のヒマラヤン・ジャーナルの内容を極く大雑把に御紹介してをく

(1) Takpo and Kongbo, S.E. Tibet. (by F. Ladlow)

右はラッドロウの一九三八年に於けるアッサム・ヒマラヤの踏査記録であり、前に彼が行つた一九三四年、一九三六年のものと同聯して讀まる

可きものである。そして今回の踏査はそのクライマックスとも見らる可きものであらう。挿入されたナムチヤ・バルワ、ギャラ・ペリイ等の山々の寫眞やアッサム・ヒマラヤのスケッチ・マップは素晴らしいものである。

(2) A Season's work in the Central Himalaya. (by J. B. Auden) 一九三九年に行はれた踏査。

(3) The Jadh Ganga Valley and the Neia Pass. (by Lieut. J. F. S. Outley) これも一九三九年の紀行で、(2)と併讀したら興味深からう。

(4) Dunggiri, Gauri Parbat, Ratan, and Chankhamba, 1939. (by André Koch) 本會報へも前に屢々紹介された昨年の瑞西遠征隊の報告で今年のA・J(五月刊)のものと殆ど同じ内容である。

(5) The Upper Shyok Glaciers, 1939. (by Lieut. I. H. Lyall Grant and K. Mason) カラコラムのシャイヨー米河に關する研究。

(6) The Polish Ascent of Nanda Devi East, 1939. (by S. B. Blake and Jakub Bujak) 昨年のポーランド遠征隊の報告でナンダ・デヴィ東峰の完登を含み、素晴らしい寫眞が入られてゐる。

この遠征の概略は、本會報九五號に吉阪君が書いてゐる。

この他には Ometta の岩登りの記述があり、これは曾て H・J 第九卷（一九三七年）にも記されてゐた。オデルとロイドの書つゝある Chorten Nyima La from the Tibetan Side はシッキムに興味のある人々には面白からう。ネーヴのカシムール登山の思ひ出は回想風に書かれたもので、この附近の古くことを知るに役立つ。

歐洲大戦の影響で獨逸のナンガ・バルバットやシッキム遠征が全然述べられて居らず、アメリカの K2 も簡単に取扱はれてゐることは、己むを得ないと云へ甚だ物足りない。

又追悼欄には戦争の爲適當な執筆者なく、ブルウスのことが簡単に記され、他に H. Wood と Visser-Hoof のこと及び昨年中死んだポーターの追悼文がのせられてゐた。

ノート欄、圖書紹介欄も今迄に比して一般に縮小されてゐるのは、總て戦争のお蔭であらう。頁數も過去に於て大體二〇〇頁であつたが、今號は一五〇頁となつてゐる。

併し矢張りヒマラヤに關心を寄せる人々には見逃がせない文獻であり、熟讀すべき點が多い。本會報にも折にふれて内容を御紹介したいと思ふ。

（望月記）

中央アルプス・乗鞍・御岳

山下 一夫著 三省堂發行

地圖五面 定價七十錢

本書は九十七號に紹介した海野君

の「谷川岳……」と同じく三省堂の「小川山岳叢書」の中の一つであつて、ポケット案内書としては可なり纏つてゐると思ふ。

著者は日本旅行協會から出てゐる「旅」の編輯者であり、且つ殆んど毎月一週間位は山へ這入つてゐるからかうしたものの編輯には支人であつて、吾々如きものが兎や角批評の筆をとるなどは盲目蛇の誘ひを免れないかも知れない。だがその素人にも多少云へる所がないでもない。

總論は小冊子の故にか少し物足りない。然し案内編はよく纏つてゐる。著者は名古屋山岳會の會報その他を可なり廣く参照しよくそれ等を活かしてゐる。他人の記録を無斷借用したり「誠に無責任な案内書」だと斷つてはゐるが私は著者が中央アルプスの權威の一人である事をよく知つてゐるので、決して無責任な書だとは考へてゐない。それは案内編の各項目を些細に地圖と共に検討すればわかる。近頃は五萬の地圖を出して、それと對照し乍ら讀まふとしても一向何處の案内を書いてゐるのか、確かりした根據で自信を持つてやつてゐるのか、疑はしいやうな案内書が矢鱈に出てゐる。山の案内書は五萬の地圖の上で完全に安全に導いて呉れるものでなければ何ならぬといふ私は思つてゐる。此の點本書はわが意を得たものである。

不足を云へば南北端にある經ヶ岳や惠那山方面が省略されてゐるのは残念だ。それから御岳と乗鞍は別に一冊のものとして出して欲しかつた。此の二つの山は附録的に取扱ふべく餘りに大きい。

尚中央アルプスと御岳に就いては少し古い（昭和十二年）が平賀文男著大村書店發行の「中央アルプスと御岳」がある事を御知らせして置く。山下君のものと併讀すれば可なり參考になると思ふ。

最後に十六年度の「山日記」中、中央アルプスの部分は山下君の著者を大分參考にした。まだ出ないが豫め御禮を述べて置く。（吉澤記）

東京帝大スキー山岳部 部内雜誌・一九三九

誌名の示す通り、所謂部内雜誌であつて、之は誇りやかに部の業績を世に問はんとする公刊報告ではない。従つてその内容は、極めて内方的で、部の人々の相互に於ける反省的乃至は自己批判的文字で埋められてゐる。かうした性質を帯びた各記録附記の文章が簡明に過ぎる爲に、部外のものには一讀了解し難い點があるのは、止むを得ぬことであらう。

曾て一九三二年度に報告された朝鮮集仙峯の遠征後、三六年の冬期チヤチャヌプリ遠征以來、その行動に就いて餘り積極的發表を見なかつたので、言はば鳴かず飛ばすの感を與へてゐた、この部の近來の狀況が、本誌に依つて窺ひ得られる。そして、果せるかなこの學校に於

ても、飽和に達した部内狀態は、當然驅つて部員の目標をヒマラヤに向けさせ、カシミールのマン・クン峯を對象として熱心な遠征計畫が目論まれたのであるが、「いやしくも生命の危険を伴ふ遠征を行ふことは、絶対に學校當局の許可があり得ない」といふ客觀的結論を得るに及んで、この惜しむべき遠征放棄といふ結果に了つてゐる。

次いで小五臺山及びアラシヤンの合同遠征も企てられたらしいが、その中止に至る經過に就いては熱意の不足といふ以外明記されてない。

在京高校山岳部懇談會の集合をリードしてゐることが部の業務記録として擧げられるほか、曾ての各高校出身者單位での行動から、大きく部内の大同團結（主として合宿形式）に轉換してゐるのが眼を惹いた。謄寫版八〇頁、受贈月日十五年九月。（N・O 生）

Das Edelweiss X

昭和十五年九月 關西學院大學
山岳部發行 菊版一〇五頁

關西學院大學山岳部の報告書であり、記録欄は昭和十一年四月から本年三月迄を簡潔に取扱つてゐる。

本文は臺灣山行（大橋三郎）、雪洞研究（淺野廣三）、春の杓子、鏝（小倉績）の三篇より成り、別に關西學院山岳部二十年史（佐藤俊夫）が加へられてゐる。最初の臺灣山行は、昭和十四年七

月八月の約二ヶ月に亘るもので、隊員は二名、登頂された山々は、花蓮港より入つてシンカン山、ハインサ山、南双頭山、タウンタウン山、尖山、更に大水窟峠から八通關に至つて新高主山、東山等で、東埔温泉を経て臺北へ出たものである。近時内地の各大學山岳部で比較的簡単に臺灣山岳に遠征を行ふ向きが頗る多くなり、それ等が概して成功を収めてゐるやうであるが、それは大學山岳部自體の視野の増大と遠征能力の擴充とを物語るものであらう。本稿末尾には費用が記されてゐるが、この遠征の純山行費用は約二百圓となつてゐる。

雪洞研究は遠見尾根（昭和十四年十二月—一月）、猿倉双子岩（十五年三月）の二回に亘る報告と、フォースト・ビウツツクの研究とから成り、この種文獻の妙い折柄參考となる點が少くない。

春の杓子、鏝の報告は、本年三月の登攀で、杓子尾根と杓子の壁、北山稜が登られてゐる。

全體を通して見た感じは、仲々簡潔によく纏められてゐると思ふが、記録欄が貧弱に思ふ。元來部の報告は、記録欄にこそ最大の努力が拂はるべきで、單に人名、地名、時間の羅列でなしに、一年間の部の動きが如實に眺められるやうなものでありたい。

（望月記）



切 拔 帳

ウエストン師逝去本會弔電
に對する英國山岳會よりの
謝禮狀

去る三月ウエストン師逝去に際し
て、本會より英國山岳會宛弔電を發
し、且それがA・J（本年五月號）
に載せられた次第は會報九四號、九
六號に報じたが、最近會員浦松佐美
太郎氏の許へ英國山岳會幹事オー
ン氏より左記の如き鄭重な謝禮狀が
到着したので、御紹介します。（浦
松氏譯）

拜啓 ウォルター・ウエストン師
逝去に際し御懇篤なる弔電を賜り洵
に難有奉存候。

同師の日本アルプスに於ける先驅
者としての事績は、永く同師の功績
として記憶致さるべきものと存候。
又同師は日本山岳會に多數の友人を
有せられ、之等の友人方に對し此の
上もなく親愛の情を寄せられ居候。
更に又日本山岳會は神河内に記念碑
を設けられ、同師に對し非常なる榮
譽を與へられ候ことも忘れ得ざる所

に御座候。

小生自身もウエストン師とは永ら
く親交あり、かかる得難き舊友を喪
ひたることを遺憾に存居候。同師は
昨年十月大手術を受けられ、それ以
來著しく體力の衰へを見せられたる
ことは事實に候も、同師逝去の報を
受取りたる時は、非常なる驚きを感じ
申候。小生は逝去の数日前同師と
午後の茶を共に致し、その際同師は
近頃はすつと気分もよく元氣も恢復
せし由申し居られ候ひし程なるに。

一九四〇年四月一日

F・オートン

ヘルベチア・ヒュッテ 閉鎖せる

昭和二年山崎春雄、アーノルド・
グラー、マックス・ヒンデル三氏
に依つて、小樽内川上流白井岳北麓
に建設せられ、現在北大山岳部管理
に關するヘルベチア・ヒュッテは、
從來一般登山者に開放せられてきた
が、近時附近に一般登山者用として
白樺小屋の建設を見、且最近登山者
の激増の結果同ヒュッテの毀損甚だし
く、爲に今後は北大山岳部關係者並
に北大文武會員専用のヒュッテとな
した旨、本年六月十四日附を以て、
北大山岳部より聲明を發した。

百間洞「山の家」新設

南アルプス、赤石岳と聖岳の中間
であり、從來露營地として屢々用ひ
られてきた百間洞近くに、本年八月

三信鐵道に依つて登山小屋が新設さ
れた。赤石岳附近及聖岳以南の登山
基地として今後益々利用されるであ
らう。

小屋は間口三・五間奥行十間總建
評三七・七五坪の立派なもので、收
容人員約百名と云はれてゐるが、當
分の間は番人は置かず、寝具と食糧
の携帶は缺く可からざるものであ
る。

百間洞の小屋へのルートは、申す
迄もなく小澁川の廣河原小屋から福
川を溯行しても、又大聖寺平の方か
ら赤石岳を越へても達せられるが、
遠山川からのルートを紹介してを
かう。それは三信鐵道の遠山口から
和田村を経て木澤村に至り（徒歩約
四時間半）、そこから北又渡迄は帝室
林野局御料林軌道敷設決定地に沿つ
て三里（約三時間半）、更に大澤渡迄
御料林内の棧道によつて三里（約三
時間半）、大澤渡には御料の小屋があ
る。それから更に御料の棧道によつ
て大澤岳に達し（約四時間）赤石澤
源頭の百間洞「山の家」に至るもの
である。この道は將來林野局で手を
入れていくので益々良い道になるで
あらう。尙遠山川西澤の西澤渡にも
御料の小屋があり、その下流から易
老岳への路も將來利用價值がますで
あらう。

谷川岳の指導標完工

去る七月下旬、谷川岳一帯に指導
標建設の計畫が、日本旅行協會と京

濱山岳團體聯合會によつてもたらさ
れ、加盟團體の非常な熱意と努力奉
仕によつて着々進捗し、最近に至
つてほぼ完成されたことは、登山界
近時の快舉と稱しても過言ではない
であらう。

中央指導標（肩の廣場）は相當大
掛りなもので、この建設擔當は主と
して登歩溪流會の人々が受持つた
が、これは八月二十八日に完成され
た。これに要したセメント四俵、砂
約二百五十貫で、肩の廣場の會て登
歩溪流會の指導標の場所に、深き三
尺直徑六尺の穴を堀り、自然石を積
み重ねてコンクリートによつて固め
たもので、相當永久性のあるもので
ある。セメント及び砂は加盟團體及
び一般登山者有志によつて、土合か
ら上げられたものであつて洵に意義
深い指導標と言ふ可きである。

右の中央指導標はじめ、各所に設
立された指導標は、加盟團體及び登
山者の協力により永久に保存されん
ことを特に期待して已まない。



會務報告

第九十六回小集會

第九十六回小集會は會報第九十八

號第一面に豫告された通り十月十日
日本商工俱樂部に於て開かれた。

講演者 西堀榮三郎氏

演題 カナダの山瞥見
同氏は社用にて今春渡米され歸路を
カナディアン・パシフィック線にと
られた。カナダの山の爲に幾日かを
用意されたのであつたが、次々に起
る社用の爲に遂に最初の目的を達す
る事が出来なかつたのでカナダの山
に就いては多くを語れないからと言
はれて、先づ以前より關心を持つて
ゐられた目下南極圏にあるアメリカ
の探險隊に就て、特にその目的、編
成、装具等に關して話された。特別
の便宜によつてその當局者たちと直
接會談されたのであつて、新聞記事
等にはあらはれた事よりも多くを我々
は知つた。それからレイク・ブレシ
ッド等にスキイに行かれた話をされ
最後にカナダの山の話となつた。レ
イク・ルイズで下車、登高の念はど
うしても諦められず、半日の餘裕を
以つてどこかへ登らうとする。未明
に出てフェア・ウェウ・マウンテン
（九千餘呎）に一人登つて行く處なん
かは大いに同感であつた。登頂、グ
リセイドを飛ばして一氣に下山、汗
を流してすぐ汽車に乗りヴァンクー
ヴァへ向はれたのであつた。その後
で同氏の撮影になるコダクロームの
幻燈が寫された。これはイーストマ
ンの廣告をするやうなものだと言は
れたが廣告する價值がある。實に色
彩が美しい。テン・ピークスの並ん

である所なんか殊に美しく、又空なが綺麗に出ずきるといふ事であつたが、雲の色が誠に美しかった。参会者は二十餘人であつたが、それだけの人数では惜しい心地がした。いろいろ旅行なんかをしたいと希つてゐると思ふやうにならない我々はこのやうな話を伺へる機会をいつも楽しみにし有難く思つてゐる。

(田邊主計)

出席者左記の通り

塚本繁松、酒井忠一、岩永信雄、横有恒、吉田竹志、西堀榮三郎、田邊主計、沼井鐵太郎、谷本弘、島田巽、野口末延、堀田彌一、關根吉郎、飛川維之、中司文夫、矢澤義弘、五十嵐清三郎、茨木猪之吉、以上十八名會員外五名

(附記)小集會番號は、第八十回小集會開催の折、誤つて第八十一回としたので、爰に訂正する次第)

十月定期理事會並

役員總會報告

十月八日(火)午後六時 於虎ノ門本會事務所

出席者 木暮、高頭、冠、島山、茨木、横、黒田、加藤、中司、野口西堀、吉澤、塚本

役員總會

一、日本山岳聯盟結成の件

積極的に結成に向つて進むこととし、冠評議員を委員長とする小委員會を作り、案を練つて次回役員總會に諮ることとす。

理事會

一、社團法人の件

十月二日附申請書提出済。

一、山岳編輯報告

編輯擔當者藤島理事外地出張に付吉澤理事中心となりて編輯に當り豫定通り刊行を期す。

一、山日記編輯報告

豫定通り十二月初旬店頭に出せる手筈なり。尙山日記編輯用整理カードを常設することに決定。

一、會報編輯報告

一、「高山深谷・十輯」刊行の件
出來るだけ刊行することに決定。

一、谷川岳山小屋の件

一、左記入會申込者承認

笠原茂雄、平井全、伊藤久行

代表者變更

日本大學山岳部

代表者 崎田 燕

團體名改稱

桐生高等工業學校報國團山岳班(舊稱校友會山岳部)

寄贈圖書

大日本帝國鐵道全圖(明治二十九年六月)掛軸一福 木村鎮吉氏寄贈
「遭難顛末報告」三部

右寄贈者 大阪高等學校旅行部

山岳映畫撮影同行記(町田立穂著) 右 體育評論社

受贈會報部雜誌

大橋圖書館 第三十一回年報

東京地學協會 地學雜誌九月號

關西學院大學山岳部

エーデルワイズ十號

ジャパンツリストビニロー

トラヴェルニユース九月號

國池製作所體育會山岳部

三角點第二號

櫻友山岳會 會報一九號

熊本アルカウ會 會報三十三號

登山とスキー社登山とスキー十月號

頂山岳會 頂 三ノ七號

廣島山岳會 會報十月號

明峰山岳會 會報十年十號

關東山岳會 旅路十月號

朋文堂 山小屋十月號

橫濱山岳會 會報一二八號

早大山岳部 リニツクサク九號

東京野歩路會 山嶺十月號

雁ハイキンググループ 會報十月號

臺灣山岳會 臺灣山岳十一號

東京山の會 ビツケル第十號

全日本齒科山岳會 會報第一號

東京雪嶺會 雪嶺二六、二七號

山梨縣景勝地協會 甲山峽水三〇號

武藏山岳會 登山十月號

昭和山岳會 會報十月號

昭和十五年十月廿五日 印刷

昭和十五年十一月一日 發行

東京市杉並區馬場二ノ四〇

編輯者 望月 達夫

東京市目黒區中目黒一ノ七四二

發行所 塚本 繁松

東京市芝區平町一(不三屋ビル)

發行所 日本山岳會

電話芝(四三)一六四九

振替東京四八二九

東京市芝區濱松町一丁目十三番地

印刷者 植田 庄助

印刷所 成文堂印刷所

ルツサツの
専門店
片相
レント店

本邦天幕製
作業之嚆矢
各學校山岳
部指定製作

東京市神田區神保町三ノ一
電話九段(三三)三二一〇

